

特277-699



*76W10638 *

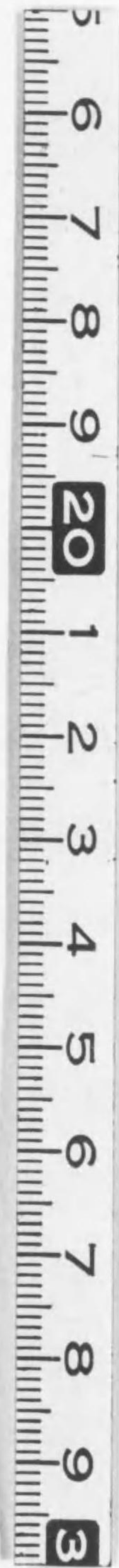
特277

699

抄 糺 の 地

作ドイジ・レドニア
譯 憲久野辻

(3) 康文 山



始



ドイツ・ロシア

抄 糧 の 地



辻野久憲譯

山本書店版



序 詞

私が好んでこの本につけた亂暴な題を、ナタナエルよ、思ひ違ひしないでくれ。これはメナルクと呼んでもよかつたんだ。けれどもメナルクは、君自身と同じやうに、ついぞ存在したことがない。この本が戴けば戴けるただ一つの間の名は、私自身の名前だ。でもさうしたとすれば、どうして厚顔しくもこれに署名などできたらう。

私は街まちひも羞はぢらひもせずにこの本を書いた。そして時に、訪れたこともないさまさまの土地や、嗅いだこともないくさぐさの香りや、行うたこともないかずの行爲について——或ひはまた、まだ返かへつたこともない私のナタナエルよ、その君について——語つてゐるとしても、それは決して嬌かたじけなくりのさせるわざではない。それに、これらの事柄も、私の本を讀んでくれるナタナエルよ、君のものとなるべきその名も知らないで君に與へるこの名前ほど偽いつはりはりではない

76W10638



のだ。

それから君は私を讀んでしまつたなら、この本を捨ててくれ。さうして外へ出てくれ。私はこの本が君に、出てゆくといふ——どこからでもかまはない、君の街から、君の家庭から、君の部屋から、君の思想から出てゆくといふ希ひを起さしてくれるといいがと思つてゐる。私の本を携へて行つてはならぬ。もしも私がメナルクだつたら、君を導かうとして、君の右手を把つたらう、でも君の左手はそれに氣づかなかつたはずだ。そしてこの把られた方の手も、私たちが街を遠くあとにするとすぐに、私はできるだけ急いで振りはなす、それから君に云つたことだ、私を忘れてくれ、と。

冀くは私の本が、この本目體によりも君に——更には君によりもほかのすべての人に君が興味を抱くやうにしむけてくれるといいんだが。

「一の巻」より

神を、ナタナエルよ、ただ到るところに見いださうと冀ふがいい。

いづれも被造物は神を指さしてゐるが、これを啓してゐるものは一つとしてない。

私たちの眼が一度び被造物のうへに留まると、それはすぐに私たちを神から逸らす。

*

どこに行かうと、君は神にしか出會ひうるものではない。神とは、とメナルクが云つてゐた、私たちの眼前にあるものことだ。

ナタナエルよ、すべてを行きずりに眺めるがいい。そしてどこにも立停つて

はならぬ。假初のものではないのはただ神だけだ、といふことをよつく胸に入れておくやうに。

大切さは君の眼眸の裡にあるのだ、その眼に眺められた物の裡にはなく。

何事によらず、君が明瞭な知識として後世大事に藏ひこんでゐるやうなものは、君にはおかまひもなく、幾世の末までも遺つてゐることだらう。なぜそんなものをさう大切がるのか。

ほかの人たちは本を著したり勉強したりしてゐるのに、私はかへつて頭で覺えたことをあらひざらひ忘れようとして、旅に三年を費した。この無學になる學問は抄らないばかりか容易くもなかつた。けれどもそれは、人々から押しつけられたあらゆる學問より私にとつては有益だつたし、また本當に教育の始ま

りでもあつた。

私たちが人の世に興味を有たうとしてどんなにかずかずの努力を拂はねばならなかつたことか、君にはとても分るまい。でも一旦興味が沸いてくると、世の常どほり——夢中にさせられてしまふ。

……私たちの針路の不安定が、生涯私たちを惱ました。何と云つたものだらう？ どれを擇ぶにしても、考へてみると怖い。義務がもう導いてくれない自由なんて、怖いものだ。それはどの方角を向いても見知らないやうな土地に切り拓いてゆかねばならぬ一すぢの途だ。そこでひとはおのおの自ら發見をする。しかしここをよく注意してくれ、その發見はただ自分だけのものだといふことを。だからアフリカの全然未開の奥地に辿ることなく覺束ない足跡とても、これに比べればまだしも危げがなからう……蔭深い木立が私たちを惹きつける。まだ潤れきつてゐない泉の蜃氣樓が……だがむしろ泉は、私たちの欲念

が流れさせるところに湧き出るのだらう。なぜといつて、土地は私たちが近づいて、それを形づくるにつれて甦^{ひび}めて存在するのだし、四圍の風景も、私たちの歩みをまへにして少しづつ姿を整へてゆくものなんだ。そして私たちは地平線の彼方まで見やりはしない。また私たちの身近くにあるものさへ、つぎつぎに移ろひゆく外觀にすぎないのだ。

それにしても、どうしてまたこんなに嚴肅な事柄に比喩などを持ち出したのか。私たちはみな神を見いださねばならぬと信じてゐる。ただ悲しい哉、かれを見つげるまでは、どこにむかつて私たちの祈りを捧げねばならぬものか分らない。そしてとどのつまりはかう考へる、かれは、この見いだしがたい者は、到るところに、何處^{いづこ}いかなるところにも在^いします、と。かうしてひとは行きあたりばつたりに跪く。

ところでナタナエルよ、君はちやうど、路を辿るのに自分自身の手を捧げもつた光に導かれてゆく人のやうなものだ。

欲念のあるところに利得がある。欲念を飽滿させるところにも利得がある。

——なぜなら、そのために欲念が一そう増進するから。蓋し、誠に君に告げよう、ナタナエルよ、欲念の對象自體のいつも偽^{いつはり}りがちな所有よりも、欲念の一つひとつの方がはるかに私を富ませてくれたものだ、と。

あまたの心地よい事物のために、ナタナエルよ、私は愛を使ひ耗^へらしてしまつた。それらのものの輝きは、私がたえずそのために燃やしてゐた愛のせゐなんだ。私は倦むといふことを知らなかつた。なべての熱情は私にとつて愛の消費だつた、それも心地よい消費だつた。

ひと一倍異端者である私は、いつもかけ隔てた意見だとか、とても迂曲を極めた思想だとか、喰ひ違つた考へだとかに心を惹かれた。どんな精神も、そのほかのものと異つてゐる點によつてしか私には興味がなかつた。こんなふう

して、とど私は自分の裡から同情といふものを追放するまでになつたのだ。そこにはもう、感動を齊しくすることを認める意味しか見てとれなかつたので。

同情ではない、ナタナエルよ、愛なんだ。

行爲の善し悪しを判断せずに、まづ行ふこと。善か悪かを懸念せずに、まづ愛すること。

ナタナエルよ、君に熱情を教へよう。

平和な日を送るより、ナタナエルよ、いつそ悲痛に世に生きることだ。私は死の睡りの憩ひよりほかの憩ひを冀はない。生涯のあひだに満たしておけなかつたあらゆる欲念、あらゆる能力が、なまじひにあとまで生き存へたからといつて私を惱ませはしまいかと、それが心配になる。私は希んでゐるのだ、私の裡で待ちまうけてゐるものを悉くこの地上に表はしきつたうへは、満足して、全く絶望しきつて死にたいものだ、と。

同情ではない、ナタナエルよ、愛なんだ。それが同じものでないことは、君にも分るだらうね。時として私が、いろんな悲しみや、愁ひや、苦しみなどに同情を寄せることができたのも、愛が損はれはしまいかと惧れたればこそだ。でなければ、私はとてもものに、そんなものには耐へられなかつたらう。それぞれの生命の心配は、それぞれに任せておくがいい。

*

ナタナエルよ、ほかの誰もがまだ與へたこともないやうな悦びを、君に與へたいんだが。それをどうして與へればいいのか、私には分らない。でもその悦びを、私は確かに有つてゐるんだ。私はほかの誰もがまだしたこともないほど心を割つて、君に話しかけたい。君が幾冊もの書物をそれからそれへと開いてはまた閉ぢて、その一冊ごとのうちにそれが啓してくれるものより以上のことを探し求めてゐるやうな、そして君がなほも待ちまうけて、君の熱情も寄るべ

なさのあまりやがて悲しみに變らうとするやうな、さういふ夜のひと時に君を訪ねてゆきたい。私はただ君のために筆を執る、また、たださういふ時間のために書き贈るのだ。そこからはどんな個人的の思想も感情も受取られず、ただ君がそこに君自身の熱情の抛射だけを見てとるやうに思ふ、さうした本を私は書いてみたい。私は君に近づきたい、そして君に愛されたいんだよ。

憂愁とは、ただ褪めた熱情にのみ基くものだ。

すべてこの世に在るものは、裸かになることができる。すべての情緒は、充ち溢れることができる。

私のくさぐさの情緒は、宗教のやうに咲き匂つたのだ。君にはこれが分るかしら、あらゆる感覚は無限の現存より發するのだ、といふことが。

ナタナエルよ、君に熱情を教へよう。

隣にその光が伴ふやうに、私たちの行爲は私たちに付き随つてゐる。それらの行爲はいかにも私たちが燬き盡しはするが、でもまた私たちに輝きを添へるのだ。

ところでもしも私たちの魂に多少の價值があつたとすれば、それはほかのものよりもつと熾んに燃焼したからなんだ。

*

ひとはおのおの不思議な可能性を藏してゐる。もしも過去がすでにひとつの歴史をそこに投げかけてゐなかつたなら、現在はあらゆる未來に充ち満ちてゐることだらうに。が、悲しい哉、唯一の過去が唯一の未來を提出する——私たちのまへにその未來の影を投げかける、ちやうど、空間に架けわたされた一本の涯しない橋のやうに。

確かに、ひとは自分の理解できないことしかしないものだ。理解するといふことは、なしうると感じることである。人間性の可能の局限を引受けること、ここに見事な定理がある。

*

そこで私たちの生命は、私たちの前にあつて、ちやうどこの冷水を湛へたコップにも譬へられよう。濡れたこのコップを熱病やみの両手がしつかと攪んでゐる。彼はその水を飲みたいと思ふ。そしてひと息に呑み乾してしまふ。待つてゐなければならぬとはよく知つてゐながら、唇からこのえも云はれぬコップを遠ざけることができない。それほどこの水は清冽で、またそれほど熱のためにひりひりと咽喉が渴いてゐるのだ。

*

君の頭腦の疲れはすべて、おおナタナエルよ、君の富の雑多さから來てゐるんだ。君はすべてのうちでどれが特に好ましいのかさへ分らない、また唯一の

富とは生命にほかならぬことも解つてゐない。生命のほんの假初の瞬間でさへもなほ死よりは強いのだ。そして死をうち消す。死とは、ありとあるものがたえず更新されるやうに、もう一つのちがつた生命に入る宥しにすぎない。だからこそ、生命の形式はいかなるものにもあれ、自己を表現するために要する時間以上に永らくはそれを引き留めておくものではないのだ。君の言が響いてゐる瞬間は幸ひなるかな。そのほかの時にはいつも、聴いてゐるがいい。しかし一旦口を開けば、もう聴かうとしてはならぬ。

必要なのは、ナタナエルよ、君の裡に溜まつたあらゆる書物を焚いてしまふことだ。

私が焚きすてたものを讀へるための

ロンド

學校机に向ひ

小さな腰掛に坐つて讀む本がある。

路を歩きながら讀む本がある。

(これは判の大きさによるのだが)

またあるものは杜かほりの中で、あるものは田舎道で讀むによい。

そしてキケロは *nobiscum rusticantur* (伴侶ともだちと俱に田野に栖まはん) と云つた。

私が驛遞馬車で讀んだものもあり、

秣小屋まぐさの奥に寐ころんで讀んだものもある。

人間には靈魂があると信じさせるための本もあれば、

その靈魂を絶望に導くためのものもある。

神の實在を證あかしするものがあるかと思へば、

それをしかねてゐるものもある。

私人の書庫のうちでなければ

許しがたい類ひの本がある。

おほぜいの權威ある評家たちから

讚辭を浴びた本もある。

蜜蜂の飼ひ方ばかり書いてあつて

一部の人々にはやや専門すぎるものもあり、

こまごまと自然を論じ立てて

それを讀めばわざわざ散歩する必要のないやうな本もある。

賢者たちには蔑あざわらしまれるが、

童らを唆かす本がある。

またこれは詞華集と呼ばれて、

凡そ題目の何なるを問はず、いはゆる佳句名文のかぎりを蒐めた本もある。

讀者に人の世を愛させようとしたらしい本があるかと思へば、

それを書き上げて著者の自殺したといふ本もある。

憎しみの種を播きはしたが、

播いたものを結局自分で收穫れてゐる本がある。

恍惚の感にみなぎり、謙讓の徳にあふれ、

讀む者をしてそれが光を放つかと思はせる本もある。

私たちよりも一そう淨らかな、一そう立派な生涯を完うした兄弟として

いつくしみの念を寄せられるやうな本がある。

あるひはまた、異様な文字で綴られてゐて、

いくら研究してみても解き明かせない本がある。

ナタナエルよ！ 私たちはいつになつたらすべての本を焚きつくすことだら

う！

たつた四スウもしない本もあれば、

おそろしく値のはつた本もある。

王さまや后さまの物語をする本があるかと思ふと、

どん底生活の人々の話をつたへる本もある。

眞晝時の木の葉のそよぎよりも

もつとかそかな言葉で綴られた本がある。

これはまたパトモス島のヨハネが、鼠のやうに齧つたといふ本だが、

でも私なら、蝦夷苺の方が好きといふもの。

その本のおかげで、かれの臟腑は苦いものでいつばいになり、

その揚句、かれはどつさり夢幻を視たとのこと。

ナタナエルよ！ 私たちはいつになつたらすべての本を焚きつくすことだら

う！！

濱べの眞砂が心地よいと讀むだけでは私は満足できない。冀はうことなら、素足でそれを感じたいのだ……どんな知識もまづ感覺をとほして享けとらないかぎり、私にとつては詮ないものだ。

これまでに、この世のなごやかな美しいものをみて、私の愛情といふ愛情がただちにそれに觸れてみたいと冀はなかつたといふことはない。大地のいつくしき美しさよ、おまへの花と開いた地膚は、ほんとに美事なものだ。おお、私の欲念が感濁した風景よ！ 私の探求が遣うてゆく潤やかな邦よ。水の面に葉

を垂れる紙草の徑。流れのうへに身を踞める蘆荻、林間地への入口。木の間隙れにちらつく無限の約束の曠野。私は岩や樹木のつくりなす廻廊のうちを立ち遣うた。繰り擴げられてゆく春を見た。

現象界の早變り。

その日以来、私の生の各瞬間は、私にとつて、まったく譬へやうもないほど瑞々しい贈物の味ひを有つやうになつた。かうして私は、ほとんど覺めることのない烈しい昏醉の裡に日を送つた。やすやすと陶酔に陥り、好んで一種の眩暈の境を遊行した。

ほんとに、唇のうへに漣返うたすべての笑ひに、私は接吻したかつた。頬にさす血潮を、臉ににじむ泪を、私は飲みたかつた。私の方に枝をさしのべてゐるすべての木の實の果肉を、齧りたかつた。逆旅のさきざきで、ひとつの餓ゑが私に會釋した。泉のほとりに至るごとに、ひとつの渴きが私を待つてゐた——それぞれの泉のまへに、それぞれに異つた渴きが。——私のもつとさまざま

の欲念を誌すために、もつと豊かに言葉の数があつてくれるといいんだが。

途の叙けたるところに歩み、

木蔭のさし招くところに憩ひ、

深く湛へたる水のほとりに遊び、

臥床のかたはらに至れば、つねに戀し、また睡まんものを。

私はどんな物のうへにも思ひきつて手をさし伸べ、私の欲念の對象の一つびとつに對してみづからに權利あるものと信じた。(へそれにまた、ナタナエルよ、私たちの希ふものはむしろ愛であつて、所有はそれほどではないのだ。)私の眼前に、ああ！ すべての物が燦然と虹の光を放つやうに。ありとある美しいものが、私の愛の衣をまとうて照り榮えもするやうに。

「二の巻」より

糧よ！

私はおんみを待ちまうけてゐる、糧よ！

私の餓ゑは中途にして休らひはすまい。

それは満たされなければ、黙しはすまい。

徳育は餓ゑを満たしもやらず、

窮乏をもつては私の魂より養へはしなかつた。」

充足よ！ 私はおんみを索めてゐる。

おんみは夏の日の黎明のやうに美しい。

糧よ！

私はおんみを待ちまうけてゐる、糧よ！

充足よ、私はおんみを索めてゐる。

おんみは夏の日の哄笑のやうに美しい。

私は知つてゐる、すでに答への般けられてゐる

欲念を自分が抱いてはゐないことを。

私の餓ゑはそれぞれにその報償を待つてゐる。

糧よ！

私はおんみを待ちまうけてゐる、糧よ！

あらゆる地點をとほして私は求めてゐる、

私のなべての欲念の充足を。

*

私が地上で識つた美しさこよないものは、

ああ！ ナタナエルよ！ それは私の餓ゑなんだ。

餓ゑはあかず己れを待つてゐてくれるかぎりのものに、

いつも誠をつくしたんだ。

鴛は酒に酔ふのだらうか。

鴛は、乳に？ それとも鴨は杜松子ハラのミに酔ふんぢやなからうか。

鴛は空翔あまがけることに酔ひ、鴛は夏の夜々に酔ひ痴れる。曠野は暑さに顫へをのく。ナタナエルよ、なべての感動が君には陶醉となつてくれるといいんだが。もしも君が食べてゐるものに酔はなければ、それは君が充分に餓ゑてゐなかつたからだ。

いかなる行爲も完まいものなら悦樂を伴ふ。この悦樂によつて、君はその行爲を果さねばならなかつたんだと識るのだ。私は難澁して仕事をしたことを誇りとするやうな人々を好まない。なぜなら、もしその仕事が難澁だつたなら、ほかのことをした方がもつとよく出来たらうに。ひとが仕事に見いだす悦びは、その仕事に合つてゐるしるしてあり、自分の歡樂に眞劍まけんになるのは、ナタナエルよ、私の一ばん大事な案内者なのだ。

*

過ぎし日の水を、ナタナエルよ、もう一度味ははうと望んではならぬ。

ナタナエルよ、未來の裡に、もう一度過去を見いださうと努めてはならぬ。

各瞬間ごとに類ひのない新しさを掴まへるがいい。そして君の悦びを準備してはならぬ。それとも、その準備した場所では、別の悦びが不意に君の前に現はれるのだといふことを知るがいい。

では、あらゆる幸福は邂逅めくろふものであり、君の行く手にある乞食のやうに、各瞬間ごとに君の前に立現はれるのだといふことを、君は理解しなかつたんだね。君がもし、君の幸福がそのやうなものだと夢想してゐなかつたといふので自分の幸福が消え失せたとか——また君の信條や願望に一致しなければ幸福を幸福と認めないとか云ふなら、君に禍ひあれ。

明日を夢想することはひとつの悦びである。けれども明日の悦びはそれとは異つたものなんだ。そして幸ひなことには、何一つとしてひとが自ら築き上げた夢に肖にてゐるものはない。なぜなら、それぞれの事物にはそれぞれに異つた價值があるのだから。

さあお出で、君のためにこんな悦びを準備しておいたよ、と云つたあなたの

言葉を私は嘉よしない。私はただ、邂逅めくろの悦びと、私の聲が巖から迸り出させた悦びとよりほかは愛さないんだ。かうして、まるで新酒にんすけが壓搾器から溢れ出るやうに、新鮮で力強いその悦びは、私たちの方に向つて流れ寄るだらう。

*
結構なことだ、と云へないやうな場合には、残念なことだ、と云ひたまへ。
そこに幸福の大きな約束がひそんでゐる。

幸福の瞬間を神から授かつたものだと思つてゐるひとがある——ではそのほかのひとは、神以外の誰から授かつたんだと思つてゐるのかしら……

ナタナエルよ、神と君の幸福とに區別けいべつをおいてはならぬ。

——もしも私がこの世に生れてゐなければ——生れなかつたことを怨み奉ることができないやうに、私を創つくりたまうたからといつて神に感謝することは

きない。

ナタナエルよ、神について語るには、ごく自然にでなくてはならぬ。

一切のものはその時機を俟つてやつてくるんだ、ナタナエルよ。いづれもみなその欲求から生れてて、いはば欲求の形に現はれたものにすぎない。

ナタナエルよ、私はもう罪などを信じない。

だが君は、思想にいくらかの権利が報はれるには、必ずや多大の悦びを伴はなくては叶はぬといふことが分るだらう——みづから俸せだと思つて思索する者は、ほんたうの強者だと呼ばれるだらう。

ナタナエルよ、なべてのひとの不幸は、ひとがつねに眺めるがはに立ち、ま

たその見たものを己れに従屬させるところから來てゐるのだ。なべての物が大切なのは、私たちにとつてではなく、物自體にとつてなんだ。冀くは君の眼が眺められた物であるやうに。

ナタナエルよ、蓋し君に肖てゐるものほとりに止まつてはならぬ。決して止まつてはならないんだよ、ナタナエル。周囲が一度び君に類似するや否や、でなければ、君が周囲に同化するや否や、君にとつて得になるやうなものも、うありやしない。周囲を捨てなければならぬ。君の家庭、君の部屋、君の過去、くらの危険なものはない。それぞれの事物からただそれが齎す教訓だけを受取るがいい。そして事物から溢れ出る悦樂がこの教訓をも潤らし盡すやうに。

ナタナエルよ、君に瞬間について話さう。瞬間の現存がどんな能力を有つてゐるか、君には分つたかしら。確乎たる死の思想を有してゐなければ、君の生

涯のほんの束の間にも充分な價值が伴なはなかつたのだ。各瞬間が死のきはめて陰暗な礎石の上にはば浮き出してゐなければ、あの陸離たる光彩を放ちはずまいといふことが君には分らないのか。

これから全時間をかけてそれをすればいいのだといふことが告げられ、證明されてゐるとすれば、私はもう何事をしようとも努めまい。ほかのあらゆる事までもする時間があるので、あることを始めようといふ氣になつただけで、私はまづ休んでしまふだらう。私のすることは、ただ行き當りばつたりのことにすぎまい。よしんば私に分つてゐることが、この生活様式はやがて終らねばなるまいといふことだけだとしても——それを生ききつたうへは、夜毎に私の待つてゐる睡りよりもやや深い、やや忘却がてな睡りの裡に休らへばいい……

かつて私は、孤立した、完璧な悦びのために、各瞬間を私の生命から切り離す慣はしをつけた。そこに忽ちにして幸福の特殊性の一切を集中するやうに。

かうして、つい最近の憶ひ出からさへ、私はもう見分けがつかないまでになつてしまつたのだ。

「三の巻」より

この水盤のうちで……(薄あかり)……一滴一滴のしづくが、一すぢ一すぢのひかりが、一つびとつこのいのちが、こころよげに死んでいった。

悦樂よ！ この言葉を、私はひつきりなしに口にしたいんだが。これにやすらぎと同じ意味を有たせたいんだが。いやただ單に、生きるいきると云ひさへすればいいものならとも思ふんだが。

ああ！ どうしてまた、神はただこの悦樂だけを目宛てにして世界をお創りつくにならなかつたものやら、これは所詮あきら、あれこれと論はねば、ひとの頭では分りつこないことなんだ。

*
ここはえも云はれぬばかり清々しいところで、この地で寝む魅力は、これまで
で睡りといふものを知らなかつたかと思はれるほどつよいのだ。
またそこでは、おいしさこの上もない食物が、私たちの空腹を覚えるのを待
つてゐたんだ。

*
ああ！ 老いさらぼうてゐながらこんな若々しい大地よ、人間のたまゆら
のいのちが有つてゐるあの甘くてほろ苦い味はひを、あのえも云はれぬ味はひ
を、おまへが知つてゐるものなら、ほんとに知つてゐるものならね！

見せかけの永遠の思想よ、死が眞近に忍びよるのを待つてゐるばかりに、瞬
間がどんなに價値づけられるものか、おまへが知つてゐるものなら！

おお、春よ！ 一年生の草木は儂い花をいそいそと咲き匂はせる。人間には
生涯にただ一度の春より訪れず、悦びの憶ひ出とて、幸福を再來させはしない

んだ。

「四の巻」より

メナルクの話

(フィエソオレの丘に臨める) フィレンツェの丘の上——と

ある園生のうち——その宵、私たちはそこに集つてゐた。

だが君たちは知つてはゐまい、知るはずがないんだ、アンゲルにイディエ
にティイルよ、とメナルクが云ふ(そして君には、いま私の名でその話をく
りかへさう、ナタナエルよ)私の青春を燦き盡した熱情を。私は時間の流れ去
るのが堪らなくつていらしてゐた。二つのうちの一つを擇ばねばならぬ必
要が、私にはいつも我慢がならなかつた。擇ぶといふことは、私の見るところ

では、選定するといふよりもむしろ選定しなかつたものを押しつけることであるやうに思はれたのだ。私は時間の狭隘さと、時といふものはただ一次元しか有つてゐないのだといふことを悟つて愕いた。それは一すぢの線で、どんなに潤かれと冀つたことか。しかも私のもろもろの欲念はその線にそうて騙けながら、お互に否應なく蠶食し合つてゆかねばならなかつた。私はついぞこれかあれかしかしなかつた。もしこれをするとなれば、あれが早速惜しまれてくるのだつた。かうして私は屢々、氣もそぞろに、それでゐて、もし何かを手に入れたやうとして兩腕をとぎせば、たつた一つのものしか掴めないのがこはさに、いつまでも兩腕を擲げたまま、何一つしようともせずの時を過ぎたものだ。私の一生の過ちは、それ以來、ほかのあまたの勉學を斷念するだけの思ひきりがつかないのので、どんな勉學にしろ永らくは續けなかつたことだつた。いかなる物でもあれ不相應に高價な値段で買ひ取られた。しかも理窟では私の苦惱の片が着くわけはなかつた。ほんのなけなしの金を用意して（誰のお蔭なのか？）歡

樂の市場に入つてゆくこと。その金を用意する！ 擇ぶこと、それは永遠に、永劫に、爾餘の一切のものを斷念することだ。そしてこの爾餘のものが數限りなくあるだけに、いつもその方がいかなるものにもあれ單一なものよりは望ましいのだつた。

そこから、地上のいかなる所有に對しても感ずるあの嫌惡の情が起りはじめた。忽ちもうあれしか所有できなくなるとふ思ふと心配になるのだ。

商品よ！ 貯藏品よ！ 山なす見つけ物よ！ おんみらはどうして異存なく身を投げ出さないのか？ それに私は知つてゐる、地上の財寶の盡き果てることを（よしそれらの財寶が無盡藏に取り替へられるものであらうと。）また、私の兄弟よ、私の乾した盃が君にとつては空ろであるといふことを（よし泉は近くにあらうと。）けれどもおんみら！ おんみら無形の表象よ！ 抑制されない生命のくさぐさの形式、もろもろの科學、また神の智、眞理の盃、涸れることのない盃、そのおんみらはどうして私たちの唇に流れしぶるのか。私たち

の渴きがどんなに激しからうとおんみらを飲み乾しもあへず、またおんみらの清水は新しくさしのべられた唇の一つびとつにむかつて、いつも清々しく湧き出でもするだらうのに。——私は今にして悟つたのだ、このおほらかな神泉の水滴はすべて等しい値ひのもので、そのいかに微かな水滴も私たちを酔はすに足り、また神の十全さと全貌とを啓すものであることを。けれどもその當時、狂氣じみた私は何を冀ひもしなかつたらう。私は生のありとある形式を渴望してゐた。ほかの誰かによつてなされるのを見てみると、どんなものでも自分でやりたくなつた。それを成し遂げたのではなく、ただやつてみたかつたのだ。

——いいかね——といふのは、私は疲れなり悩みなりをさして怖れてはゐず、むしろそれらは人の世になじんだしるしだと思つてゐたのだ。私はパルメニドが土耳其語を識つてゐたといふので、三週間彼をねたんだ。それから二ヶ月すると、天文学を發見したテオドオゼを。かうして私は、そこに少しも限界を縮けないでおかうとしたお蔭で、私自身のこよなく漠然とした、こよなくあや

ふやな像を描きあげたのだ。

——メナルクよ、君の一代記を話してくれ給へ、とアルシィドが云ふ。——
そこでメナルクが言葉を繼ぐ。

——十八歳になつて、初歩の課程を了へると、精神は勉強に倦み、心は張りを失ひ、生きることに焦れ、肉體は抑壓されることにむづかつて、私は放浪熱を煽りながら、宛て途もない旅に出でたつた。私は君たちの知つてゐるものをすつかり識つた。春だの、大地の匂ひだの、野に咲きみだれる草花だの、河面に立ち罩める朝霧だの、さては牧場にたなびく夕靄だのと。いくつも街々を横ぎつて、どこにも足を停めようとはしなかつた。私は思つたものだ、地上の何ものにも執着せず、不斷に變貌するものを透して永遠の熱情を驅りたてる者は幸ひだ、と。私は厭うた、家庭を、家族を、ひとが休息を見つけると思ふあらゆる場所を。また渝らざる愛情や、戀の誠や、思想への戀着や、正義を危くするやうなありとあるものを。私は云つたのだ、それぞれの新しさに對して、私

たちは常に全身を打ちゆだねてかからねばならぬ、と。

さまざまの書物の教へてくれたところによれば、自由とはいづれも假初のものであり、それは恰も薊の種が根をおろすべき豊沃の土地を求めて此處彼處と飛び散らふやうに、自らに隷屬するものか、でなければ少くとも獻身するものを選ぶだけだといふこと——更にはただちつと靜止するとき初めて花咲くものだといふことだつた。けれども學校の教室で、理窟はひとを導くものではなく、いづれの理窟にもその逆が打樹てられうるものであつて、これを見つけることだけが問題なのだ。教はつたので、私は長い旅路のさなかで、折をり、逆の理窟を索ね出さうと努めたのだつた。

どんなものでもあれ未來でさへあれば、私は快い、不斷の期待をかけて生きてゐた。恰も答へを待ちまうけてゐる前に投げ出された問ひのやうに、なべての悦樂を前にして生れ出る享樂への渴望は、忽ちにしてその享樂自體に先じて來るものであるといふことを體得した。あらゆる泉が私に渴きを教へてくれ、

また渴きを和らげるのできない水氣のない沙漠にあつては、赫々たる炎天にさらされたわが身の身熱の厲しさの方をむしろ愛しんだといふことが私の幸福ともなつた。そこには、夕べになると、一日ぢゆう願ひを寄せられてゐたので清々しさのひとしほな、えも云へぬ綠泉があつた。私は、太陽に灼きつけられ、まるで昏々たる熟睡に落ちようとしてゐるやうな闊い砂地に立つて——けれども暑さはとてもきびしかつた、そして波立つ熱氣のさなかにあつて——私は感じた、眠りもあへずになほも脉うつてゐる生命が、地平の彼方に意氣萎えてうちをのき、私の足許で愛の想ひに心ときめかせてゐるのを。

來る日も來る日を、時を逐うて、私のひたすらに願ひ求めるものは、自然の層一層醇乎たる滲透ばかりだつた。私は自分自身によつてあまり拘束されないといふ貴い賜物を有してゐた。過ぎし日の憶ひ出も、私の上に、ただ私の生涯に統一を與へるために必要なもの以外には力を及ぼしはしなかつたのだ。それは恰も、テエゼを過去の戀に結びつけはしたが、彼が刻々に移ろふ新しい景色

を見過ぎつつ旅路をつづけるのを止めもあへなかつたあの神秘的な糸にも似てゐた。復たもこの糸は断ち切られねばならなかつたのか……妙へなる再生よ！

私は屢々朝の行旅で、ひとつの新しい生命感を、私の知覺力の鋭敏さを賞翫した。——(詩人の賜物よ、と叫んだ、おんみは絶えざる邂逅の賜物だ)——かうして私はあらゆる方角にほほゑみかけた。私の魂は岐に開かれた旅籠だつた。入らうとする者は入つてきたのだ。私は融通無碍の、協調的な、あらゆる感覺の意のままになる、注意深い者に、個人的な考へを、一つとして有たぬほどの聴き手に、束の間のあらゆる感動と、些細なことに對して不服を唱へるよりも何ものをも悪いとみなさぬほど微妙な反作用との捉へ手になつた。なほ又、間もなく、私の美に對する愛情が、いかに才かばかりの醜に對する嫌惡によつて支へられてゐるものであるかといふことに氣づいたのだ。

私は倦怠から生れるものであることを知つてゐたので、疲勞感を厭ひ、またひとが事物の多様性に期待をかけるやうにと希つた。どこであらうと處きらは

ずに身を横へた。畑に寝た。野に寝た。大きな麥束の間に黎明のうち顛へるのを見た、また山毛榉林の上に小鳥の群の目覺めるのを。朝になると私は草のうちで身をそそぎ、さし昇る朝日が濕つた着物を乾かしてくれた。歌聲に送られて歸りゆく豊かな收穫物と重たげな荷車に繋がれた牛の群とを見たこの日にもまさつて田園の美しかつた日が、いつたい世にあらうか！

私の悦びがあまりに大きくなつて、これを傳へたいと、誰かに私の裡でこの悦びを活かしたものを教へたいと思ふやうなときがあつた。

夕べが來るたびに、見識らぬ村々で、日中は外に散らばつてゐた家庭の人々が、再び寄り集ふのを見た。父親は仕事に疲れて歸つてきた。子供たちは學校から戻つてきた。家の扉は、暫時のあひだ、光と温かさ、笑ひとを迎へるために開かれてゐたが、やがて夜にそなへて閉ざされた。あらゆる流浪の屬はいづれももうそこにはひれなかつた。戸外の膚を摩くやうな風も。——家族よ！私はおんみらを厭ふ！鎖された家庭、立てられた扉、幸福の猜み深い占有。

——時には、夜の闇にまぎれて、私は窓硝子に倚りかかり、長い間、ある家の風習に眺め入つてゐた。父親は彼處、ランプの傍にゐた。母親は縫ひ物をしてゐた。祖父の場所は空いてゐた。子供は、父親の傍で勉強してゐた。——そして私の心は、その子供を途上に連れ出したい欲求でふくれ上つた。

その翌日、復た彼が學校から出てくるところを見かけた。そのまた翌日、私は彼に話しかけた。四日ののち、彼はすべてを打ちやつて私に睨いてきた。私は曠野の素晴しさのまへに彼の眼を開いてやつた。彼はその曠野が彼を迎へ入れようとしてゐることを悟つた。そこで私は、彼の魂がひとしほ放浪的に、やがては愉しいものになるやうに——そのうへ、私とさへ袂を分つて、身の上の孤獨を識るやうにと教へてやつた。

ただ獨り、私は厲しい矜持の悦びを味はつた。曉に先じて起き出るのが好きだつた。刈株の上に太陽を呼びかけた。雲雀の歌聲は私の幻想をそそり、朝露は私の東明の沐浴となつた。喜んで粗食に甘んじ、ほんの少量を攝るばかりだ

つたので、頭は晴ればれとなり、あらゆる感覚が私には一種の陶醉となつた。それから酒をどつさりとおほつた。しかしいかなる酒も、あの斷食からくる眩暈をも、太陽が昇つて、私が稻堆の凹みに寝入るまでに味はふ朝まだきのあの曠野のたゆたひをも與へはしなかつたのだ。

身に携へてゐたパンを、時には半ば失神状態になるまでも食はずにもつてゐた。すると自然が次第によそよそしさを減じてきて、私の裡に一そう深く滲み透るやうに思はれた。それは外界の奔溢であつた。外に向つて開かれた私のあらゆる感覚を透して、私は現存せる外界を迎へ入れた。一切のものが、私の裡に、招き寄せられたのだつた。

私の魂はつひに、寂寥にそそられ、黄昏ちかく私を疲れはてさせる熱情によつて満たされるに至つた。私は矜りによつて身を支へてゐた。けれどもその頃は、前年、あまりに兇暴すぎる點を除いて私の有してゐる氣質を全部私に傾ち與へてくれたイレエルの身の上を懷しんでゐた。

黄昏ちかく、私は彼と語つたものだ。彼も詩人だつた。彼はあらゆる諧調の道に通じてゐた。なべての自然の効果は、ひとがそこにその原因までを讀み取れるほど明瞭な詞のやうに、私たちには變通自在となつた。私たちは羽音によつて昆蟲を、歌聲によつて小鳥を、砂上に印しずされた足跡によつて婦人の美しさを認めうるやうになつた。彼の心をも亦、冒険への渴望が灼いた。彼の力が彼を大膽にした。素よりどんな榮光もおんみに値ひしはすまい、われらが心の若き日よ！ 歡喜の念をもつてありとあるものを翹望しながら、私たちは徒らに私たちの欲念の勢ひを殺がうと努めた。私たちの思念はそれぞれに一つの熱情と化した。感じるといふことは、私たちにとつては不可解な嚴まじしさを具へたものだつた。私たちは美しい未來を待ちまうけながら、素晴らしい青春を使ひ耗らした。そして未來につづく途は涯はしないものとは思へなかつた。かくて私たちは、口いづばいに甘い蜜とえも云はれぬ苦さとの味を満たす垣根の花を齧りながら、その途を大跨で進んでいった。

時として、復た巴里を横よぎる途すがら、私は數日乃至は數時間を、私の勤勉な少年時代が流れ去つたアパルトマンで過すのだつた。そこは寂として聲なき世界であつた。留守番の女の世話で、家具類には布片かたが被せてあつた。手にランプを把とつて、私は部屋から部屋へと、幾年かこの方立てきつた鎧扉を開けもしなければ、樟腦の匂ひのしみたカーテンを掲げもしないで遣やひ歩いた。家内うちの空氣は重苦しく、臭氣が立ち罩めてゐた。私の部屋だけが飾り付けされたままになつてゐた。家ちゆうで一番暗い、一番靜かな部屋である書齋の中には、書棚やテーブルの上の書物が、私が置いていつたままの順序を守つてゐた。時に、その一卷を開き、晝間ではあつたが灯あかりを點したランプを前にして、時を忘れるのが愉しかつた。また時には、グランド・ピアノの蓋を開いて、記憶を辿りながら古い曲の韻律を索たづねてもみた。けれども、ほんの不完全にしか思ひ出せず、かへつて悲しみを誘よふばかりなので、弾く手を止めた。その次の日、私はまた巴里を遠くあとにしてゐた。

生れつき人懐こく、またまるで流動體じみた私の心は、あらゆる方角に向つて擴まつていつた。どんな悦びもわが身一つに屬してゐるものとは思へなかつた。私は誰でも往き會ふ人々をその悦びに招き寄せた。そして私がただ獨りて悦びを味はふやうなときは、ただ矜りのせゐにすぎなかつた。

ある人々は私の獨り善がりを買めた。私は彼らの愚昧さを詰つた。私は男にまれ女にまれ何びとをも愛しはしないが、友誼、慈愛、乃至は愛情を愛するつもりでゐた。その愛情を一人の人間に與へるとしても、他の誰かの手から彼を奪ひ取らうとはせず、ただ愛情を試してみたにすぎなかつたのだ。また誰かの肉體であれ心であれ獨り占めにしようともしなかつた。まるで自然に對してこの地上に遊牧の旅を續けるやうに、どこにも足を停めなかつた。なべての選り好みも、私には正しいものと思はれなかつた。すべての人々のために留りたいと思つて、私はある一人の人間に己れを與へはしなかつた。

市から市への憶ひ出に、私は一つづつ遊蕩の憶ひ出を結びつけた。ヴェネチ

では、假面舞踏會に参加した。アルト管絃器とフルートの伴奏する畫舫のうちで戀を味はつた。ほかにも男女を満載した畫舫が數艘それに續いた。私たちは曙光を迎へようとリイドを指していつたが、太陽が昇つたときには樂の音もとだえてゐたので、疲れはてて、睡りに落ちてゐた。けれども私は、これらのうはべの悦びが遺してゆくあの疲勞を、更にはそのためにこれらの悦びまで色褪せて感ぜられるあの目覺めのときの眩暈をさへ愛してゐたのだ。ほかのさまざまな港町へも、大汽船の水夫たちと一緒に出かけいつた。私は灯影も定かならぬ裏通に降りていつた。けれども心の裡では、私たちのただ一つの誘ひである體驗への欲望を詰つてゐた。そして船員たちを怪しげな家のほとりに遺しておいて、またしづかな港へひき返した。そこでは、不思議に哀れつばいざわめきの音が悦惚の境を透して流れてくるあの裏町の憶ひ出を伴うて、黙々として聲なき夜の攝理が説かれてゐるのだつた。私はむしろ田畑の財寶の方を愛した。

とはいへ、二十五歳になつて、旅に疲れたのではないが、この流浪の生活はぐくんだ過度の自負心に訶まれて、私ももうそろそろ新しい生活様式に入つてもいい年頃になつたといふことを悟つた、いや、さう信じこんだのである。なぜなのだ？、なぜ、と私は彼らに云つた、君たちは私がなほも旅に出てゆくやうにと云ふんだらう。私はあらゆる路のほとりに新しい花が咲き匂つたといふことをよく承知してゐる。けれどもその花々はいま君たちを待つてゐるのだ。蜜蜂はただ一時より漁りあるきはしない。そののちは出納係になる。――私は棄てて顧みなかつたアパルトマンに引返した。家具類の上に被せてあつた衣片を取り去つて、窓を開けた。そして、流浪の身でありながら、心ならずも積み立てねばならなかつた貯金を流用して、手に入れうるかぎりの高價な品物や割れ物類、器物や珍籍類、ことに私が繪について有してゐた知識のおかげで非常に安く手に入れられた繪畫などで身のまはりを埋めた。十五年のあひだ、私は守銭奴のやうに金を貯めた。全力を傾けて金持ちになつた。勉強もした。

古語を學び、あまたの本が讀めるやうになつた。いろいろな樂器も弾けるやうになつた。毎日毎時が何か有効な研究に振り當てられた。歴史と生物學とが特に私の興味を惹いた。さまざまの文學をも識つた。私の寛大な心と由緒正しい家柄とのせゐで失はずにすんだ友情をも掻き集めた。この友情は私にとつて爾餘の一切のものより尙いものではあつたが、それにさへ私は少しも執着しはしなかつたのだ。

五十歳になつて、時機が來たので、私はあらひざらひ賣り拂つた。いかなる物象に對しても私は確乎した眼識と知識とを具へてゐて、その値が増さないやうなものは何一つとして所有してゐなかつたので、僅か三日にして莫大な財産を築き上げた。私はこの財産全部を一生涯使用しうるやうに投資した。この地上に個人的なものは何一つとして、往時の假初の憶ひ出でさへも遺しておきたくなかつたので、一切合財賣り拂つてしまつた。

私は田園まで睨いてきたミルテイルに云つた――この妙へなる長、この露、

この光、この清々しい大氣、君の生命のこの脈動、それらのものの感覺は、君がそこに全身を投げ出すことさへしてきたなら、君になほ一そう大きな歡喜を與へることだらう。君はその境地に到つてゐると信じてゐる。が、君の生命の精髓は閉ぢこめられてゐるのだ。君の妻、子供たち、書物、研究などが、それを引き留め、神の眼から昏ませてゐるのだ。

（君はただ今この瞬間に、生命の強い、完い、直の感覺を味はひうると信じてゐるのか——かかる感覺でもないものを忘れもしないで？ 君の思考の仕來りが邪魔してゐる。君は過去に生き、未來に生きてゐるのだ。しかも自ら進んでは何一つ認めはしない。私たちは、ミルティルよ、生命の早取寫眞に寫つたもの以外には、何ものでもありやしない。來たるべきものが何一つとして生れいではしないうちに、すべての過去はもう死に瀕してゐる。瞬間！ ミルティルよ、瞬間の現存がいかに大きな力をひめたものであるかといふことはやがて、君にも分るだらう。なぜなら、私たちの生命の各瞬間は、本質的に取り替へが

たいものなのだから。君も時にはそこに思ひを潜めてみるがいい。ミルティルよ、この瞬間には、もう妻もなければ子供もないといふことを、君が冀はうなら、君が識つてゐようなら、君はこの地上にあつて神の御前にただ獨りであらうのに。けれども君は彼らを思ひ出す、彼らを擔ぎ歩いてゐる。まるで一切の君の過去、ありとある戀愛、更にはありとある地上の屈托、それらのものを失ふのが心配のあまりのやうに。それにひきかへ、私の愛はあげて、あらゆる瞬間に、新しい驚異にそなへて、私を待つてゐる。私は恒にその愛を識つてはゐるが、ついぞ見識りごしになつたことはない。君は、ミルティルよ、神が採りたまふあらゆる形容に氣づいてはゐないのだ。その一つを眺めすぎ、それに溺れこむと、君の眼は眩む。君のちつと動かない熱愛の眼眸が、私には心配になる。それがもつと擾れてゐてくれるといいのだが。すべての閉された扉の背後に、神は在します。神のあらゆる形容は愛でたく、且つ一切はこれ神の形容なのだ。――

……私の築き上げた財産をもつて、まづ一艘の船を借り入れ、三人の友人と數人の船夫と、四人の少年水夫を引具して、私は海に乗り出した。私はそのうちの一等醜い少年を熱愛した。けれども彼の優しい愛撫よりも、むしろ大瀉を凝視してゐる方が好ましかつた。黄昏には、物語にでもあるやうな港に入つてゆき、時には夜もすがら戀を索ねまはつた揚句、夜明け前にまたその港をあとにした。ヴェネチヤで、惚々するほど美しい遊女に行逢うた。私は三宵彼女をいつくしんだ。傍において見ると、他のさまざまな色戀の歡びも忘じ果てるほど、彼女は美しかつたのだ。私が船を賣つてしまつたか、與へたかしたのも、彼女にだつた。

私は幾月かコーモ湖畔のさる宮殿に住んだ。そこにはいと妙へなる樂匠たちが寄り集うてゐた。私はまたそこに、淑やかてお話の上手な麗人たちをも呼び集めた。そして伶人の奏でる樂の音に恍惚となりながら、私たちは宵を語り

明かした。それから、水に脚を浸してゐる大理石の階段を降りて、流れ漂う小舟のうちに、漣のしのびやかな韻律に合せて私たちの戀を寐らせにゆくのだつた。まどろんだまま歸途につくことがあつた。小舟は岸に近づくと不意に目を覺ました、そしてイドワーマは私の腕に倚りかかつたまま、黙々として階段を登つた。

その翌くる年、私は海邊からほど遠からぬ、ヴァンデの宏壯な公園に住んでゐた。三人の詩人が、私の栖居で張られた饗宴を詩に詠んだ。彼らはまた、木の間隠れに魚類の棲む池や、白楊樹の並樹道、獨り離れて聳え立つ柏、秦皮の繁みなどや、公園の美しく整然とした有様などをも話してくれた。秋がくると私は巨木を伐り倒させ、私の栖居を荒廢するにまかせた。たれ一人として、雜草の生ひ茂るにまかせておいた小徑を追ひつつ、かつて大勢の客人たちが逍遙した公園の有りし姿を語る者はないだらう。並樹道の涯から涯まで、杣人たちの打々たる斧の音が轟きわたつた。杣人の衣類が路傍の樹々の枝にひつ懸けて

あつた。伐り倒された樹々の上に擲がつた秋の日は素晴しかつた。そこには類ひのないほどの華麗さが領してゐたので、ずつとあとになつても、私はもうほかのことを考へられなかつた。そこで私はわが身の老いを認めた。

その後、私は次々とアルプス山中の山莊に、香橙のやうに甘酸つばい枸櫞の實る、チタ・ヴェキアの繋高い杜のほとり、マルタの白い宮殿に住んだ。また四輪馬車で、ダルマチヤの野に流浪の旅をつづけた。そして現在では、フィエソオレの丘に面した、フィレンツェの丘の上の、今宵諸君に集まつてもらつたこの園生に住んでゐる。

私わが身の幸福をさまざまな出来事に負うてゐるのだなどとは云はないでくれ給へ。むろん出来事も私に都合よく起りはしたが、しかし私はそんなものを利用しはしなかつたのだ。私の幸福が富の力を藉りて成つたのだとも思はないでくれ。地上になんらの執着をも有しない私の心はいつも貧しかつた。そこで私は易々と死につくことだらう。私の幸福は熱情の所産なんだ。選り好みを

せずに一切のものを透して、私は氣もそぞろに熱愛したのだ。

「八の巻」より

私も時には過ぎ去つた月日のうちに、そこからひとつの物語を編み出さうとして、いく束ねかの憶ひ出をさがしもする。けれども、そこにわが身の姿を見失つて、私の生命はそこから溢れ出てしまふのだ。私には、恒に新しい瞬間の裡にしかほんとに生きる途はないやうに思はれる。ひとが呼んで、静思する、といつてゐるものは、私にとつてはひとつの拘束で、とても堪へられつこはない。私はもう、孤獨、といふ言葉の意味も分らない。ただ獨り自己を守つてゐるのは、もう何びとでもないことだ。私はあまたの者にみたされてゐる！——それに、私はただ至るところにあつてのみ、自己を守るのだ。そしてたえず、欲念がそこから私を驅りたてる。いかに美しい憶ひ出も、私には幸福の剩り物としか見えない。どんなに小さい水滴も、よしやそれが一滴の泪であらうと、

一旦私の手を濡らすやいなや、私にはほんとに貴い現實のものとなる。

ナタナエルよ、ああ！ 君の魂がそれにほほえみかける時に、君の悦びを満たすがいい——更にまた、君の唇がまだ接吻にたへるほど美はしく、君の抱擁が嬉しい時に、君の愛の欲念を満たすがいい。

なぜなら、君は考へ、また云ふことだらう——果實はそこにあつた。その重みが、すでに枝をしなければ、疲らせてゐた。——私の口はそこにあつて、欲念でいっぱいになつてゐた。——けれども、私の口は閉ざされたきりて、私の手は祈りのために結び合はされてゐたので、さし伸べる事ができなかつた。——かくて私の魂と肉は望みもなく渴ききつてゐた。——時は望みもなく過ぎ去つた、と。

……おお！ もしも時間がその源に遡りうるものなら！ そしてまた、過去

が立復りうるものなら！ 君をあの惚々するやうな私の青春の月日の方に連れていつてやりたいんだが。その日頃には、生命が私の身裡にまるで蜜のやうに流れてゐたものだ。——あんなに幸福を味はつても、魂は慰められはしないのだらうか？ なぜなら、彼處、あの園生にゐた私は、この私であつて、別人ではなかつた。私はあの蘆荻の歌を聴いてゐた。あの花の香りを嗅いでゐた。あの子供を眺め、かれに手を觸れた。——それに、来る年々の新しい春ごとに、かうした遊戯もそれぞれ伴つてゐるものだ。——だが、かつてのわが姿に、あの別人に、ああ！ どうして私は戻れよう！——（いま市の藪のうへに雨が降り濺いでゐる。私の部屋はもの佗しい。）彼處では、ロシフの羊の群が家路につき頃だ。あの羊どもは山から歸つてきたのだ。沙漠は落暉を浴びて金色に輝きわたつてゐた。夕べのしづけさ……いま、（いま。）

跋 詞

ナタナエルよ、さてここで、私の本を捨ててくれ。それから獨立してくれ。私を棄て去つてくれ。棄て去つてくれ。今ぢやあ、君が邪魔になる。君が妨げになる。君のために吹聴した愛が、私につきまとひすぎる。私は誰かを教育するやうなふりをする事に倦みはてた。いつ私は、君が私とひとしい者になつてほしいと云つたらう。——私が君を愛するものも、君が私と異つてゐればこそだ。私が君の裡に愛するものは、ただ私と異つてゐる點だけだ。教育するんだつて！——私自身以外の、誰をいつたい私が教育するつていふのか？ ナタナエルよ、私が君にそんなことを云ふだらうか？ 私はいつ涯てるともなく自分自身を教育した。今なほ續けてゐる。私はただ私のなしうる世界でしか自身を尊敬しないんだ。

ナタナエルよ、私の本を捨ててくれ。そこに満足してゐてはならぬ。君の眞理が誰かほかの人によつて發見されうるものだと信じちやならぬ。何より、そんなことを愧ぢるがいい。よし私が君の糧を探してやつたとて、君はそれを食べるほど餓ゑてはゐまい。君の臥床をしつらへてやつたとて、そこで寐まうとするほど君は睡くはあるまい。

私の本を捨ててくれ。そこにはただ人生に臨んで採りうる數かぎりもない態度のうちの一つしかないのだといふことをよつく納得してくれ。君自身の態度を索めろ。ほかの誰かが君同様に立派になし遂げるやうなことを、してはならぬ。誰かが君同様に立派に云へるやうなことを、云つてはならぬ。君同様に立派に書けるやうなものを、書いてはならぬ。——君の有するもので、君自身の裡以外のどこにもないと感じられるものにだけ執着するがいい。そして辛棒強く、でなければせつかちにでもよからう、ああ、生きとし生ける者のうちで最も掛け替へのない者を、身をもつて創り出してくれ。

『地の糧』は一八九七年にメルキニウル社から上梓された。ジイド二十八歳の時である。しかしこれは単に彼の初期の最重要作であるばかりではなく、もし「ジイド教」とも稱すべきものがありとすれば、その精髓はこの中に説き（それとも、歌ひ）盡されてゐると云つても過言ではあるまい。この抄本の選擇方針は、大體N・R・D版『ジイド選集』中に抄出されてゐるものを中心とし、他は私の信ずる所に従つた。同書中の重要な章句は殆ど剩さず収録し得たと思つてゐる。

私は兩三年前全集用にこの書を全譯した。其當時これは火の様に私を灼いた。それから二年後の今、漸くジイドがこれを發表した年齢に達し、丁度本叢書用に再びこの抄本をつくる次第となつたが、なほ種々と感慨なきを得ない。

(譯者)

昭和十一年六月二十日印刷
昭和十一年六月二十五日刊行

地の糧抄

定價拾錢

譯者 辻野久憲

刊行者 山本武夫
東京市牛込區矢來町七〇

印刷者 山田兼次郎
東京市牛込區岩戸町一七

刊行所 山本書店
東京市牛込區矢來町七〇
振替東京七四八六七番

山本文庫

3

1	ボオドレエル	青年文學者への忠言	佐藤健彰共譯	定料二十錢
2	ボオドレエル	小説文詩	三好達治譯	同
3	ジイド	地の糧抄	辻野久憲譯	同
4	ジイド	アリスアの日記	山内義雄譯	同
5	ジイド	青春	今日出海譯	同
6	ゲイテ	ゲイテの言葉	石中象治譯	同
7	カロツサ	從軍日記	竹山敏彦共譯	同
8	ハウプトマン	謝肉祭	大野俊一譯	同
9	モオバサン	眞珠嬢	岸田國士譯	同
10	レニエ	ヴェニス物語	草野貞之譯	同

定料二十錢
送料二錢

11	ケツセル	ソグウブ大尉のお茶	青柳瑞穂譯	同
12	トルストイ	田園詩	平井肇譯	同
13	ジエフリズ	小鳥の英文學	戸川秋骨譯	同
14	古今奇觀	百花村物語	佐藤春夫譯	同
15	チエホフ	愛人への手紙	湯淺芳子譯	同
16	ロオレンス	ロオレンスの手紙	織田正信譯	同
17	ランボオ	ランボオ詩抄	中原中也譯	同
18	アポリネエル	アムステルダムの水夫	堀辰雄譯	同
19	ラデイゲ	ドニイズ・花賣娘	堀口大學譯	同
20	マンスフィールド	蜜月・幸福	平田秀木譯	同

フランス エピキュルの園 草野貞之譯 刊七月上行旬

ルナアル 博物誌抄 岸田國士譯 同

ボオドレエル ポオ 論 小林秀雄譯 同

リルケ 戀する人々 茅野蕭々譯 同

ファイリツプ 獅子狩 堀口大學譯 同

ニーチエ ツアラトウストライ抄 登張竹風譯 同

ドストエフスキ 病中日記 中山省三郎譯 同

ジエームズ 千載一遇 平田禿木譯 同

コクトオ 雄鷄とアルルカン 佐藤朔譯 同

ミユツセ 乙女等は何を夢見るか 戸川エマ譯 同

終

